短期留学が日本人留学生にもたらす影響の実態調査

A Case Study of Effects of a Short-term Study Abroad Program on Japanese University Students

仁科　恭徳[1]　　表谷　純子[2]　　森下　美和[1]

Yasunori NISHINA, Junko OMOTEDANI, Miwa MORISHITA

（要旨）

グローバル人材育成が急務の課題となっている昨今、学部単位で留学プログラムをカリキュラムの一部に導入する大学が増えつつある。希望者のみが参加する派遣留学とは異なり、卒業要件の一部として義務的に実施される全員留学は、様々な諸問題が想定され、その効果も明らかになっていない。そこで、本稿では、まずこの全員留学に先行して実施された英語圏の短期留学プログラム参加者への質問紙調査結果に基づき、学習者が留学先で実際に何を学び、体験し、感じたかを具体的に調査することで、今後、効果的に全員留学を成功させるための基礎資料を提供する。

（Summary）

This paper attempts to identify factors in student cultural and learning experiences through questionnaire analysis conducted on 16 university students who participated in a month-long Study Abroad (hereafter, SA) program in New Zealand after completing their first year of study. The results of the questionnaire analysis indicate the effectiveness of this SA program on the enhancement of cultural awareness and the improvement in their English communication skills. Nevertheless, regarding the English proficiency such as reading academic papers and authentic materials, the results show the statistically significant differences between two groups. The group which expressed more positive effects on the improvement in the above mentioned English proficiency has a higher pre-SA TOEFL ITP© score compared to the other group. Especially, the listening score is significantly different between the groups. These suggest that the factors for a successful SA program lie not only in a program itself but also in a preparation stage before the SA program. Therefore, this paper scrutinizes the factors leading to success in a SA program and reports on both positive and negative aspects as basic data for constructing effective SA programs in the future.

キーワード：留学プログラム、質問紙調査、ノン・パラメトリック検定
Key Words：Study Abroad Program, Questionnaire Survey, Non-parametric Test

１．神戸学院大学 グローバル・コミュニケーション学部　准教授
２．神戸学院大学 グローバル・コミュニケーション学部　非常勤講師

１．はじめに

文部科学省の学習指導要領によると、小学校ではコミュニケーション能力の素地をはぐくみ、中学校では外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、高等学校では授業は英語で行うことを基本とし、英語の発信力を高めるよう指導することが教員に求められている。外国語の教員をはじめ様々な分野でのグローバル人材育成が急務の課題となっている昨今、日本の大学業界では、留学プログラムを必修としたカリキュラムの改変、ならびに留学を売りとする新学部の設置が隆盛を迎えつつある。希望者のみを派遣する留学プログラムとは異なり、学部単位で「全員留学」を売りとするこのような各大学の試みは、始まったばかりであり、未だ試験的に実施している感は否めない。

例えば、2015年に新設された神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部では、実践的英語コミュニケーション力が備わった英語教員の養成を一つの目標としており、英語教員志望者を含め全学部生が３年次前期に留学するカリキュラムとなっている。実践的な英語教員を養成するという名目においても、留学経験をより実りあるものにする必要があるが、そのためには英語学習者が留学を通じて実際に何を学び、体験し、感じたかを具体的に調査することは極めて重要であり、その結果は、今後、効果的に留学プログラムを成功させるための基礎資料となりうる。そこで、本稿では、まずグローバル・コミュニケーション学部における全員留学に先行して実施された同じく同学部限定の英語圏短期留学プログラム参加者への質問紙調査結果に基づき、学習者の体験を具体的に可視化する。

２．先行研究

２．１．日本人留学生と外国人留学生の推移

日本学生機構の調査によれば、2014年度の日本人学生の合計留学者数は2012年度と比較して2014年度は15,846名増加しており、グローバル化の波を受け海外留学のニーズが高まっていることが推察される[1]。表１の海外留学者数は、１位：アメリカ合衆国（18,769人）、２位：カナダ（7,373）、３位：オーストラリア（7,276）、４位：英国（6,864）と、英語圏への留学が上位を独占し、アメリカ合衆国を中心とした英語圏の人気の高さを示している。

表１．日本学生機構の調査による日本人学生の海外先・留学者数（一部改変）

順位（2014年度）	国名	2012年度	2013年度	2014年度	2012年度からの増減
1	アメリカ合衆国	15,422	16,794	18,769	＋3,347
2	カナダ	6,333	6,614	7,373	＋1,040
3	オーストラリア	5,768	6,392	7,276	＋1,508
4	英国	5,641	6,519	6,864	＋1,223
5	韓国	5,542	5,211	5,533	－9
6	中国	5,796	4,022	4,765	－1,031
7	台湾	1,680	2,080	2,974	＋1,294
8	ドイツ	2,495	2,408	2,768	＋273
9	タイ	1,909	2,249	2,754	＋845
10	フランス	2,290	2,309	2,738	＋448
11	その他	12,497	15,271	19,405	＋6,908
計		65,373	69,869	81,219	＋15,846

＊留学者数の増減は論者が算出した。

韓国、中国においては日本人留学者数が減少しているが、台湾、ドイツ、タイ、フランスへの留学者は増加傾向にある。「その他」の海外留学先も2012年度の12,497名から2014年度の19,405名と155％の伸びを示しており、留学先が多様化しつつあることが伺える。

また、同機構の調査によれば、日本への外国人留学生は、2014年５月１日の時点で全体では増加傾向にあり、出身国別の内訳は、１位：中国（94,399人）、２位：ベトナム（26,439人）、３位：韓国（15,777人）、４位：ネパール（10,448人）、５位：台湾（6,231人）と続き、アジア地域からの留学生が９割以上を占めている[2]。中曾根元首相が83年当時に打ち上げた「留学生10万人受け入れ計画」（門倉1994, p.7）から比べれば、現在、経済産業省が研究会を設置するなど注目している「内なる国際化」も表向きは進展していると言えよう。これに伴い、日本人の「グローバル化」や「異文化理解」の需要は一気に高まっており、海外留学を通した生の異文化体験を学生にさせることが大学教育でも期待されつつある[3]。このような流れを受け、最近では、海外留学を卒業要件の一部としてカリキュラムに組み込み、学部レベルで全員留学させる大学も増えつつある。

２．２．各大学における全員留学の実施例

表２は、関西圏の大学の学部・学科（もしくはコース）単位で海外留学を必修に入れている４つの私立大学のプログラムの概要で、各学部のホームページで確認できる主要留学先数と、１学年の学生数を派遣先数で割った１校あたりの平均派遣人数も付記している。

表２．関西４大学における Study Abroad プログラムの概要（2016年８月時点の情報）

大学名	期間	主要留学先	学年	学生数／校（英語圏）
神戸学院大学 ＧＣ学部	半年	英語圏（６校） 中国語圏（２校）	３年次前期	12名程度
近畿大学 国際学部	１年間	英語圏（12校） 中国語圏・韓国語圏（４校）	１年次後期 ２年次前期	国際学部の１学年の学生数は約500名で提携留学先拠点数は500校を超える。
同志社大学 ＧＣ学部	１年間	英語圏（15校） 中国語圏（３校）	２年次	５－６名程度
関西大学 外国語学部	１年間	英語圏（11校） 中国語圏・韓国語圏（２校）	２年次	15名程度

＊ＧＣはグローバル・コミュニケーションを指す。

表２に挙げた大学はあくまで例であり、全員留学を必修としてカリキュラムに組み込んでいる、もしくはその予定をしている大学は他にも多く存在する。例えば、大阪国際大学は、国際教養学部を2015年４月に開設し、３年次に４ヶ月以上の全員留学がカリキュラムの一部となっている[4]。また、一橋大学は2018年度までに新入学生全員を短期語学留学させ、立教大学や早稲田大学も全員留学の方針を打ち出している[5]。派遣する時期や期間は大学によって異なり、派遣先においても昨今の社会のニーズに応え、英語圏のみならず中国や韓国にも派遣先を設けている大学もある。このように、社会進出前の最後の準備期間として、大学在籍中に実際に留学を通して語学習得や異文化理解を促進することが重視さ

れつつある。

２．３．留学先での言語習得・異文化交流の問題点

留学費用の高騰や、景気の問題があっても、無理をしてでも子供を留学に行かせる家庭は多い。しかしながら、念願の海外留学に行ったはいいものの、日本人特有の内向き思考に加え、日本の環境が心地よく、語学習得・異文化交流が失敗に終わる日本人留学生も多い（小林, 2011）。留学すれば何かしらの学びは得られるかもしれないが（Bateson, 1994）、多くの学生は様々な要因から、言語習得や異文化交流において渡航前に描いていたような結果を達成できるわけではない（Kinginger, 2009）。特に、論者がまとめるに、留学先で出会う人々との交流や外国語を習得する上で、学生の前には障壁となる３種類の要因が立ちはだかる（Ayano, 2006; Jackson, 2006; Pearson-Evans, 2006; Ming-Hung Lam, 2006; Gao, 2010）

表３．海外留学時に障壁となる３要因とその内容

要因名	要因の変種		
異国生活要因	外国語使用のストレス	外国人という疎外感	現地で出会った日本人との交流
コミュニケーション要因	コミュニケーションスタイルの違い	会話トピックの好み	ユーモアの違い
社会・民族的要因	世界観・価値観・人生観の違い	社会・経済レベルの違い	学術レベルの違い

表３に示す３種の各要因が複雑に絡み合って、留学先において学習者の言語習得や異文化交流が阻害されることが想定される。この中で、派遣元もしくは受け入れ側の大学が対応できるものの一つは、「現地で出会った日本人との交流」であろう。派遣元の大学では、提携先の環境を入念に調査した上で日本人が少ない派遣先に切り替えるなどの対応をし、また受け入れ先もバランスよく各クラス在籍学生の国籍の割合を考慮する、授業外でもAll English を徹底するなど、ある程度は回避できる可能性はある。

しかしながら、他の要因に関しては、自動的にクリアすることは極めて難しく、異文化を知る上ではむしろ醍醐味ともなり得る。よって、視点を変えれば肯定的にも捉えるべき要因であり、実際の質問紙調査でこのような観点が問題になるのかどうかも合わせて調査する。

３．リサーチ・デザイン

３．１．リサーチ・クエスチョン

２節までの先行研究を概観すると、（日本人）留学生が留学先で言語習得・異文化交流する際には、それを阻害する様々な要因が存在するため、多くの学生にとって語学習得、異文化交流において留学前に期待していたほどの効果を得るのは難しい。そこで、実際に、どのような側面において、留学先で肯定的・否定的な経験をしているのか、具体的には、「１．どのような異文化体験をしたか？」、「２．どのような英語スキルが身についたと実

感したか？」、「３．どのようなコミュニケーションスキルが身についたと実感したか？」、「４．海外での生活や学習など留学全般に対しての印象は？」、「５．ホストファミリーとの生活から何を得たか？」、「６．留学を経て、どのような英語力を伸ばしたいと感じるか？」の、６つのリサーチ・クエスチョンをたて、調査を進める。

３．２．調査協力者

本アンケート調査協力者は、2016年２月20日から３月14日までニュージーランドのハミルトン市に位置する国立ワイカト大学にて英語の語学研修に参加した関西圏の私立大学所属の大学１年生（18－19歳）計16名を対象とし、TOEFL ITP スコアの平均が418点（最大490点、最低360点）の英語力であった[6]。語学研修終了後、本アンケート調査を実施した。

３．３．質問紙調査

短期留学を経験した調査協力者に対して３．１節の各リサーチ・クエスチョンに関する情報を得るため、全32項目の質問紙調査を実施した。Dornyei（2003）に倣い、回答者が考えずに中間カテゴリー（どちらでもない）を選択するのを避けるため、各質問項目について４件法（あてはまる・まあまああてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない）を採用した。実際の質問項目は Appendix1 を参照されたい。調査時期は2016年３月15日から３月31日までで、有効回答数は全16名（男性４名、女性12名）であった。

４．データ分析

４．１．２段階尺度分析

質問紙の各項目に対する学生の考えを明確にするため、４段階尺度形式を「あてはまる」「あてはまらない」の２段階に変換した上で再集計し、χ^2検定（適合性の検定）を実施した。以下、表４から表９まで調査結果を概観する。なお、各表のＱ＃は質問項目番号を表し、編みかけの項目は否定的な意味で有意差があったことを表す。

表４「異文化体験に関して」の各項目のχ^2検定結果（$N=16$）

Ｑ＃	２段階尺度に変換した集計結果		χ^2検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
1	0	16	16.00 **
2	0	16	16.00 **
3	2	14	9.00 **

* $p<.05$. ** $p<.01$

まず、「異文化体験」に関しては全項目において肯定的な結果となった。興味深いのは、留学経験を通して外国文化がより好きになった（Ｑ２）だけではなく、日本の外で一定期間滞在したことで、自国文化の良さ（Ｑ３）も見えてきたようである。現地で感じた異文化は学生によって異なるものであり、それを如実に反映している肯定的なコメントには、「（学生３）バスでは必ず降りるときにお礼を言ったり、お店の店員さんが Have a nice day

などというのも、印象に残っています。」、「（学生６）レディー・ファーストが徹底していること。また、お礼や挨拶がきちんとできている印象を受けました。」、「（学生８）小学生ぐらいの男の子でも、レディー・ファーストをしていたこと。」、「（学生９）バスに乗るとき、日本人は男女関係なく停留所に並んだ順に乗っていきますが、ニュージーランドでは先に並んでいても男子高校生たちが女子に順番を譲ってくれて日本にはない文化だと感動するとともに、なんてよい国なんだと思いました。」、「（学生15）シャワーはできるだけ短くする必要があった。毎朝、朝食はシリアルで、弁当は必ずサンドイッチとお菓子とリンゴで日本に比べると質素だった。夕食はワンプレートで、野菜多めで、かなりヘルシーな食事だった。」などがあった。

表５「英語の基本スキルに関して」の各項目のχ^2検定結果（$N=16$）

Q＃	２段階尺度に変換した集計結果		χ^2検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
5	1	15	12.25 **
6	1	15	12.25 **
7	0	16	16.00 **
8	8	8	0.00
9	7	9	0.25
10	8	8	0.00

* $p<.05$. ** $p<.01$

次に、「英語の基本スキル」に関しては明暗が分かれた。留学経験者は、英語を用いたコミュニケーション力（Ｑ６；Ｑ７）が向上したことは実感している。コメントの一部に、「（学生２）海外の学校の授業は、日本の授業と違ってすごく能動的な授業だったので、すごくよかったです。自分の意見を言ったり、話し合ったり、ゲームをしながら学んだりと、自分から学ぼうとする姿勢を持っていれば、英語力が伸びていく授業だと思いました。」とあり、学生が能動的にコミュニケーションをとるような工夫が授業内でされていることが

表６「英語の応用スキルに関して」の各項目のχ^2検定結果（$N=16$）

Q＃	２段階尺度に変換した集計結果		χ^2検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
11	2	14	9.00 **
12	6	10	1.00
13	5	11	2.25 *
14	9	7	0.25
15	11	5	2.25 *
16	7	9	0.25
17	6	10	1.00 *
18	5	11	2.25 *
19	11	5	2.25 *
20	13	3	6.25 *

* $p<.05$. ** $p<.01$

分かる。一方、座学を中心とするライティング力（Ｑ８）やリーディング力（Ｑ９）、文法力（Q10）にはあまり効果を実感していないが、このようなスキルは、日本在学中にでも十二分に鍛えることが可能であり、留学後にもあまりその効果が期待できないことから、留学前の派遣元大学のカリキュラムの中でしっかりと教育していく必要があろう。

「英語の応用スキル」に関しても、海外留学が肯定的に影響しているものと、学習者がその効果をあまり実感していないものとに分かれた。自分の考えを表現（Q11）したり、発音を意識したり（Q13）、英日翻訳に慣れたり（Q17）、文法をより意識するようになった（Q18）ようである。これは、実際に英語でコミュニケーションをとる機会が圧倒的に増え、自らの意見を発話・表現する機会が増えたため、必然の結果であったと言えるかもしれない。一方、語彙力（Q12）、実践的且つ高度なインプット力（Q14；Q15；Q19；Q20）、実践的且つ机上のアウトプット力（Q16）には効果を実感していない。

表７「コミュニケーション力に関して」の各項目のχ^2検定結果（$N=16$）

Q＃	２段階尺度に変換した集計結果		χ^2検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
21	1	15	12.25 **
22	2	14	9.00 **
23	1	15	12.25 **
24	8	8	0.00
25	13	3	6.25 *
26	1	15	12.25 **
27	1	15	12.25 **

* $p<.05$. ** $p<.01$

表６までの結果から、留学経験者は「コミュニケーション力」の向上を概ね実感しているようであるが、表７からもそれは読み取れる。日常生活に支障をきたさないコミュニケーション力がつき（Q22）、内向きの日本文化から外向きの欧米文化へと性格が変容してきている（Q23）。一方でネガティブな結果も読み取れ、地元民との交流機会は参加者によって異なっていたこと（Q24）、アジア人（特に日本人）と話す機会が多かったこと（Q25；Q26）が分かる。海外留学をしたからといって、自ら積極的に交流を求めなければ、現地人との交流は難しく、ホストファミリーによってもそのコミュニケーション量に差があるようである（参加者との私信）。こちらは表３で論者がまとめた海外留学時に障壁となる３要因の内容とも合致する。

表８「留学全般に関して」の各項目のχ^2検定結果（$N=16$）

Q＃	２段階尺度に変換した集計結果		χ^2検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
28	1	15	12.25 **
29	0	16	16.00 **
30	0	16	16.00 **

* $p<.05$. ** $p<.01$

「留学全般」に関しては、日本の大学で受けている授業とは異なり、あくまで本当の意味でのオールイングリッシュ（Q28）を好意的に受け取る学生が多かった。また、内容は違えど各参加者には留学時に何かしらネガティブな側面が認められたにもかかわらず、参加者全員が再度留学を強く希望し（Q29）、内面的にもポジティブな方向へと変容している様が伺える（Q30）。

表９「ホストファミリー制度に関して」の各項目のχ^2検定結果（$N=16$）

Q＃	２段階尺度に変換した集計結果		χ^2検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
31	1	15	12.25 **
32	3	13	6.25 *

* $p<.05$. ** $p<.01$

「ホストファミリー制度」に関しては、異文化体験（Q31）や英語の習得（Q32）の側面で効果的と感じた学生がほとんどであった。全ての学生のコメントは紹介できないが、「（学生10）ホストファミリーに自分たちと同年代の人がいて、その人が遊びに連れて行ってくれた時に、ホストファミリーの友達などと会話をしたり、遊んだりし、若者の文化を体験できたことが一番印象に残っている文化体験です。」や、「（学生16）ホストファザーのお父さんの誕生日パーティーが印象に残りました。ニュージーランド式のパーティーではなかったらしいのですが、日本では経験したことのない誕生日会でした。日本では家に仲の良い友人を招いてすることはよく聞きますが、この時は親戚が大集合し、身内で祝う形でした。料理も豚の丸焼きをメインにした豪華なものでした。」など、学生にとってホストファミリーとの生活が異文化体験や英語を使う絶好の機会であったことが分かる。今回参加した学生は、現在までに海外での寮生活を体験していないため、どちらの宿泊形態が異文化体験・英語習得の上で効果的であるのかという比較体験はできないが、概ね満足しているようである。

４．２．質問紙調査：クラスター分析

次に、留学を体験した学生間の類似性と異なりを可視化するため、アンケート項目のうち最後の項目（履修したい科目に関する質問）を除く全32変数を用いて、短期留学修了生のグループ分けを実施した。平方ユーグリッド距離を用いたウォード法によるクラスター分析（サンプルクラスター分析）を行い、エントロピーによって自動判別した結果、大きく４つのクラスターに類別できた（図１参照）。ただし、学生14（以下、図中では「学生」をＳとする）は他の結果とはかなり離れていたため外れ値と判断し、残りのデータで再度クラスター分析を行った。その結果、第一クラスターには４名、第二クラスターには11名の調査対象者が含まれていた。

次に、各クラスターの特徴を調べるため、カレイラ（2015）に倣い、各項目についてマン・ホイットニーのＵ検定を行った。ノンパラメトリック法のマン・ホイットニーのＵ検定を採用したのは、正規性検定（Shapiro-Wilk）の結果、ほとんどの質問項目において正規

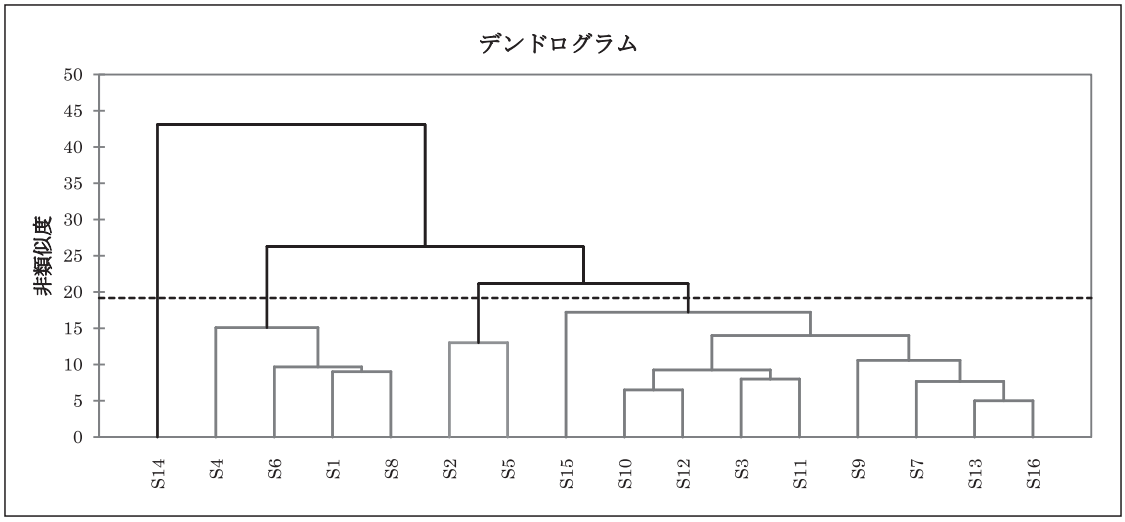

図１．クラスター分析の結果１（全被験者データの場合）

分布していなかったためである。各項目の群間で特に有意差がみられたものが表10であり、マン・ホイットニーのＵ検定（有意水準５％）の調査結果も併せて示している（元の４件法での分析を実施）。なお、全項目の結果は Appendix2 を参照されたい。

表10．クラスター間で有意な差が認められた４項目

Ｑ＃	第一クラスター（N＝４）		第二クラスター（N＝11）		マン・ホイットニーのＵ
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
9	3.50	0.50	2.55	0.66	7.00 *
14	3.25	0.43	2.18	0.39	3.00 **
15	3.25	0.43	2.09	0.29	1.50 **
20	3.00	1.00	1.64	0.64	7.00 *

* p ＜.05. ** p ＜.01

クラスター間で有意差が見られた項目は、（Ｑ９）「リーディング力の向上の実感」、（Ｑ14）「英語の映画やテレビ、ラジオ番組、歌などが理解できるようになった」、（Ｑ15）「英語の本や新聞、雑誌などを読むことができるようになった」、（Ｑ20）「英語の専門書・論文を早く効果的に読むことができるようになった」の４項目である。このマン・ホイットニーのＵ検定の結果から、第一クラスターの方が第二クラスターよりも、高度且つ実践的な英語力が身についたかどうかという点で有意な差が見られる。よって、第一クラスターは「高度な英語力習得」群、第二クラスターは「一般的な英語力習得」群とすることができる。

それでは、なぜ第一クラスター群のメンバーは高度な英語力を身につけたと実感したのであろうか。以下は、クラスター間の TOEFLITP の結果を以下に示す。なお、被験者の TOEFL スコアに関しては、Shapiro-Wilk の正規性検定で正規分布とみなすことが出来たため、 t 検定の結果も合わせて示す。

表11．クラスター間での TOEFLITP スコアの比較

	第一クラスター（N＝４）		第二クラスター（N＝11）		t（12）
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
L	47.75	2.62	43.1	3.11	2.62 *
G	41.75	5.30	39.9	3.42	0.60
R	42.50	3.10	41.4	5.89	0.42
Total	439.75	28.57	414.60	29.01	1.37

* p ＜.05. ** p ＜.01

表11の結果から、トータルスコアを含め全セクションに関して、平均点は第一クラスターが第二クラスターを上回っている。また、有意水準５％で両側検定の t 検定を実施したところ、リスニングスコアは t（12）＝2.62、p ＝.02、グラマースコアは t（12）＝0.60、p ＝.56、リーディングスコアは t（12）＝0.42、p ＝.68、トータルスコアは t（12）＝1.37、p ＝.20となり、クラスター間で有意差が見られたのはリスニングスコアであった。つまり、留学前の英語力の差が、留学を通して向上したと感じる質問項目と密接に関連していると予測できる。クラスター間で有意な差が見られたＱ９、Q14、Q15、Q20はどれも高度な英語力を必要とするものであり、元々英語の基礎力が高かった第一クラスターの方が、実際に留学を通してさらに高度な英語力が身についたと感じるようである。留学中は全てのインストラクションが英語で行われるため、特にリスニング力が高く有意差が認められたグループの方が、リーディング等も含めた留学中の学習に有利に働いていると予測できる。

また、この結果から、留学期間の学習をより効果的にするためにも、留学前に十二分に語学指導をしておく必要があると言えよう。第一クラスターに分類された被験者のコメントには、「（学生６）アカデミックな内容の授業でもディスカッションの機会が多く、自分の考えを持つ、相手に伝える、という機会が多くありコミュニケーション能力を鍛えられました。まだ自分の言いたいことを英語で表現しきれずにもどかしい思いをすることも多いですが、相手に伝えようと工夫する力がついたように思います。」とあり、学術的な内容に関してもリスニングも含めたコミュニケーション力が求められる授業内容であったことが分かる。

５．考察

５．１．リサーチ・クエスチョンへの回答

以下は各リサーチ・クエスチョンに対して、本調査で明らかにした回答である。まず、「RQ1. どのような異文化体験をしたか？」に関しては、挨拶、（レディーファーストなどの）ジェンダー、食生活、民族の歴史、生活スタイル、娯楽など、一般的な生活に関わる広範囲の事柄に関して、日本との異文化を経験したようである。先行研究では、留学生が地元民との目標言語を介した社会的交流機会を得ることがいかに困難であるかが指摘されているが、本調査の結果から、ホストファミリーとの生活やコミュニケーションが実は、最も親しくなった地元民との目標言語を介した社会的交流機会であることが分かる。次

に、「RQ2.　どのような英語スキルが向上したと実感したか？」に関しては、コミュニケーション力で必要となるスピーキング力とリスニング力に関して、英語スキルの向上を実感したようである。また、読解や実践的な英語力の向上に関しては、被験者間で差が見られた。特に、留学前から英語力が高かった学生、特にリスニング力が高かった学生にとっては、アカデミックな英語力を含めた高度な英語力においても向上したと実感したようである（クラスター分析とマンホイットニーのＵ検定の分析結果を参照）。

そして、「RQ3.　どのようなコミュニケーションスキルが身についたか？」に関しては、初対面でも積極的に話しかけるようになるなど、日本人の典型的な特徴である内向的な性格から、自らの意見を積極的に発する外交的な性格へと成長したようである。また、「RQ4.　留学（海外での生活や学習）に対しての印象は？」に関しては、異文化体験を通して、外国文化の良さを実感するだけでなく、そのような異文化を通して日本文化の良さを再実感したようである。最後に、「RQ5.　ホストファミリーとの生活から何を得たか？」に関しては、ホストファミリーとの生活を通して、異文化体験をした被験者も多く、現地の実際の生活を疑似体験することで、RQ1 と RQ4 に対する回答の効果が得られた。

５．２．留学を経て

最後に、RQ6「留学を経て、どのような英語力を伸ばしたいと感じるか？」（複数回答可）の質問項目の集計結果は、海外留学（16名）、試験対策（TOEIC、TOEFL など）（14名）、スピーキング（14名）、留学生との交流授業（13名）、外国人との会話ラウンジ（課外授業）（13名）、ネイティブスピーカーによる授業（12名）、リスニング（７名）、映画やテレビ、歌などを用いた授業（７名）、文法（６名）、読解（３名）、コンピュータ利用による個人学習（２名）、その他（０名）であった。よって、短期留学経験者は、全般的にコミュニケーションを高める授業を渇望していることが分かる。留学経験を通して、コミュニケーション力の向上を実感したようであり、特に再度留学したいと感じている学生は全員であった。また、TOEFL などの試験対策に関しても需要が高い結果となった。一方で、留学期間中に向上したと感じられなかった文法や読解、映画やテレビ、歌などを用いた実践的英語力を伸ばしたいという学生は少ないことも分かる。本来であれば、このような力を身につけることで連動して総合的な英語力も向上するはずであるが、留学体験者はそれを実感していないため、留学前に大学のプログラムの中で特に文法や読解は集中的に鍛える必要があり、これらの向上こそが留学を成功させる秘訣であることも本調査結果から明らかとなった。

６．結語

６．１．まとめ

本稿では、英語圏の短期留学プログラムに参加した大学生への質問紙調査結果に基づき、留学中に得た経験を詳細に可視化した。その結果、短期間であっても、コミュニケーション力の向上、英語力向上に向けたこれからの課題、異文化体験、自国愛の向上など、多くの項目において参加者に肯定的な効果があることが分かった。また、海外留学時に障壁となる３要因に関しては、当該プログラムの引率者であった論者が感じるに、今回は異国生

活要因（外国語使用のストレス、外国人という疎外感、現地で出会った日本人との交流）が参加者の異文化交流や語学学習に影響していると感じた。これは、今回は短期留学であったことが主な理由であると考えられ、今後、彼らが長期留学を体験し、現地人や外国人留学生と多くの交流を持つことによって、他の２要因であるコミュニケーション要因（コミュニケーションスタイルの違い、会話トピックの好み、ユーモアの違い）と社会・民族的要因（世界観・価値観・人生観の違い、社会・経済レベルの違い、学術レベルの違い）が障壁となる可能性は高い。このような予測される障壁の対策としての授業を長期留学前に提供し、異文化生活に向けて入念に準備することこそが、留学を成功させる一つの方策であろう。

６．２．今後の課題

今後の課題として、引き続き同様の調査を経年的に実施することで、留学に対する経験・意識等の変化を調査していきたい。この理由として、本研究は関西圏の中堅私立大学１校に所属する大学１年生16名から収集したデータに基づいていることから、結果を一般化することが難しい。Long（2005）によると、ニーズ分析は多角的な角度から調査を行い、調査協力者のサンプリングを考慮する必要がある。無論、広い地域から複数の大学に所属する学生のデータを集め分析する必要もあるが、さらには、同様の調査を学年別（例．１年生、２年生、３年生、４年生）、世代別（例．10代、20代、30代）、職業別（例．学生 vs. 社会人）、大学別（例．国立 vs. 私立）、地方別（例．都会 vs. 地方）、宿泊形態別（例．寮 vs. ホームステイ）など、多角的要素から分析し、その結果を集約していくことで、海外留学が日本人英語学習者に与える影響を詳細に特定することができ、より洗練された形で一般化することも可能となろう。最後に、近い将来、本学部を卒業した学生で英語教員になった学生に、大学時代の留学経験がどのように教員活動の中で活かされているかを追跡調査することで、留学経験が次世代の英語教員養成に必要不可欠であることを示したい。

注

1　日本人学生の海外留学状況（http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html）

2　平成26年度外国人留学生在籍状況調査等について
（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2015/03/16/1345878_02.pdf）

3　初瀬（1988）によると国際化の内なる局面を⑴　「日常の中の国際化」状況、⑵　その状況に対応すべき「心の中の国際化」、⑶　未来を切り開く「市民の国際化」活動とし、門倉（1994，p.3）は「国内」「内面」「内発的」国際化と言い換えている。内なる国際化とは、「国境なき経済が展開されるなかで、世界とともに生きるために、モノ・カネの国際化のみならず、文化や習慣などの心理面や精神面の国際化も必要である。人の交流を通じた文化や習慣の相互理解が必要で、外国人労働者や留学生の受け入れ等が有効で、それにより日本人の心や慣行を国際的に開くことをいう。」
（http://www.city.shunan.lg.jp/hp/gappei/sg0708.htm）

4　大阪国際大学国際教養学部ＨＰ（http://www.oiu.ac.jp/kk/）

5　日本経済新聞　電子版　2014年７月３日「一橋大、新入生の留学必修に　立教や早稲田も」
（http://www.nikkei.com/article/DGXNASDZ03001_T00C14A7MM0000/）

6　ワイカト大学の学生数は約13,000人で、そのうち約2,800人が70カ国からの留学生である。

Appendix

１．質問項目は以下のとおりである。１．あてはまらない、２．あまりあてはまらない、３．まあまああてはまる、４．あてはまる、で回答を依頼した。

１．異文化体験が出来た。　２．外国の文化が好きになった。　３．日本の文化がより好きになった。　４．印象に残った海外での文化体験を述べて下さい。（自由記述）　５．何かしら英語力が向上した（と思う）。　６．スピーキング力が向上した（と思う）。　７．リスニング力が向上した（と思う）。　８．ライティング力が向上した（と思う）。　９．リーディング力が向上した（と思う）。　10. 文法力が向上した（と思う）。　11. 英語で自分の考えや感情、言いたいことを表すことができるようになった。　12. 英語の単語やイディオム、言い回しをたくさん覚えることができた。　13. 英語の正しい発音を身につけることができた。　14. 英語の映画やテレビ、ラジオ番組、歌などが理解できるようになった。　15. 英語の本や新聞、雑誌などを読むことができるようになった。　16. 英語で e-mail ／手紙を読んだり書いたりできるようになった。　17. 英語を日本語に円滑に訳すことができるようになった。　18. 英語の文法を意識するようになった。　19. 英語で学問的・専門的な講義を理解することができるようになった。　20. 英語の専門書・論文を早く効果的に読むことができるようになった。　21. 何かしらコミュニケーション力が向上した(と思う)。　22. 英語で様々な日常的状況に対処することができるようになった。　23. 初対面の人でも抵抗なく話せるようになった。　24. 地元の人と話す機会が多かった。　25. アジア人以外と話す機会が多かった。　26. アジア人と話す機会が多かった。　27. 日本人と話す機会が多かった。　28. オールイングリッシュがよかった。　29. 海外にもう一度留学したい。（選択・自由記述両方）　30. 留学して自分は良い方向に変わったと思う。（選択・自由記述両方）　31. ホストファミリーを通して異文化を学ぶことができた。　32. ホストファミリーを通して英語を学ぶことができた。　33. 印象に残ったホストファミリーとの体験を述べて下さい。（自由記述）

【留学を終えて今後受講したい授業・プログラムは？】（複数選択可）

１．試験対策（TOEIC、TOEFL、IELTS、英検など）　２．文法を徹底的に教えてくれる授業　３．読解を徹底的に教えてくれる授業　４．リスニングを徹底的に教えてくれる授業　５．スピーキングを徹底的に教えてくれる授業　６．英語のネイティブスピーカーによる授業　７．留学生と交流できる授業　８．映画やテレビ、歌などを使った授業　９．コンピュータを利用した個人でじっくり勉強できる自学自習授業　10. スタッフが外国人しかいないラウンジでいつでも会話できる課外授業　11. 海外の大学への長期・短期留学　12. その他

２．各質問項目の群別の平均値・標準偏差とマン・ホイットニーのＵ検定の結果は以下のとおりである。

項目	第一クラスター（$N=4$）		第二クラスター（$N=11$）		マン・ホイットニーのＵ
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	3.75	0.43	3.82	0.39	23.50
2	3.50	0.50	3.64	0.48	25.00
3	3.25	0.43	3.00	0.60	17.50
5	4.00	0.00	3.73	0.45	16.00
6	3.50	0.50	3.36	0.48	19.00
7	4.00	0.00	3.55	0.50	12.00
8	2.75	0.43	2.55	0.66	17.00
9	3.50	0.50	2.55	0.66	7.00 *
10	2.75	0.43	2.55	0.89	18.00
11	3.00	0.00	3.09	0.51	24.00
12	2.75	0.43	2.73	0.62	21.00
13	2.75	0.43	2.82	0.57	23.00
14	3.25	0.43	2.18	0.39	3.00 **
15	3.25	0.43	2.09	0.29	1.50 **
16	3.00	0.00	2.64	0.77	14.00
17	3.25	0.43	2.55	0.50	9.00
18	2.75	0.43	3.00	0.74	26.00
19	2.75	0.43	1.91	0.67	8.00
20	3.00	1.00	1.64	0.64	7.00 *
21	3.50	0.50	3.82	0.39	29.00
22	3.25	0.43	3.45	0.66	27.00
23	3.50	0.50	3.45	0.66	22.00
24	2.75	0.43	2.55	0.66	17.00
25	1.75	0.43	2.27	0.75	30.00
26	3.25	0.83	3.73	0.45	28.50
27	3.25	0.83	3.73	0.45	28.50
28	3.50	0.87	3.55	0.50	20.00
29	3.75	0.43	4.00	0.00	27.50
30	3.50	0.50	3.64	0.48	25.00
31	3.00	0.71	3.73	0.45	34.00
32	3.00	0.71	3.55	0.78	31.00

* $p<.05$. ** $p<.01$

参考文献

初瀬龍平（1988）『内なる国際化』三嶺書房.

門倉正美（1994）「「内なる国際化」と日本語教育」『横浜国立大学留学生センター紀要』No. 1, 1-17

カレイラ松崎順子（2015）『大学生を対象にした英語学習に対するニーズ分析』統計数理研究所.

小林明（2011）「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『ウェブマガジン留学交流』2011年５月号 Vol.2　http://www.jasso.go.jp/about/documents/akirakobayashi.pdf

日本学生支援機構「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」 http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html

文部科学省「現行学習指導要領・生きる力」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm

文部科学省「「日本人の海外留学者数」及び「外国人留学生在籍状況調査」について」 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/1330698.htm

Ayano, M. (2006). Japanese students in Britain. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and studying abroad* (pp. 11-37). Clevedon: Multilingual Matters.

Beteson, M. (1994). *Peripheral visions*. New York: Harper Collins.

Dornyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: Construction, administration and processing*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Gao, X. (2010). To be or not to be “part of them”: Micropolitical challengers in Mainland Chinese students’ leaarning of English in a multilingual university. *TESOL Quarterly, 44*, 274-294.

Jackson, J. (2006). Ethnographic pedagogy and evaluation in short-term study abroad. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and studying abroad* (pp. 134-156). Clevedon: Multilingual Matters.

Kinginger, C. (2009). *Language learning and study abroad: A critical reading of research*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Long, M.H. (2005). *Second Language Needs Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ming-Hung Lam, C. (2006). Reciprocal adjustment by host and sojourning groups: Mainland Chinese students in Hong Kong. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and studying abroad* (pp. 91-107). Clevedon: Multilingual Matters.

Pearson-Evans, A. (2006). Recording the journey: Diaries of Irish students in Japan. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and studying abroad* (pp.38-63). Clevedon: Multilingual Matters.

ReseMom（リセマム）（2015）「2012年の海外留学者数が８年ぶりに増加、留学先１位は中国」（http://resemom.jp/article/2015/03/02/23238.html）